

『世界遺産熊野花の窟と比婆之山～比婆山学×出雲学×熊野学～』

2019・8・3（土） 13:30～15:00

広島県庄原市・帝釈峡まほろばの里・時悠館

みえ熊野学運営委員長 三石 学

1、日本書紀の熊野と古事記の出雲

- ・ 現存最古の歴史書（古事記712年、日本書紀720年編纂）
- ・ 歴史、神話、伝説、歌謡、祭祀、信仰、芸能など道教、仏教、儒教の影響を大きく受ける。
- ・ 古事記は全体の1/3が神話。日本書紀は歴代天皇の事績の記述に重点が置かれ、国の成り立ちを明確にし、自分たちのアイデンティティを確立し国の内外に知らしめるため編纂された。白村江の戦い（663年）や壬申の乱（672年）などが影響。
- ・ 古事記では出雲の国譲り神話やスサノオのヤマタノオロチ退治などが詳しく書かれているが、日本書紀には神武東征の記述などが詳しく書かれている反面、国譲りには触れられていない。また、イザナミ葬送地も古事記では出雲と伯耆の国境の比婆山、日本書紀では熊野花の窟となっている。
- ・ 天孫降臨神話の前に出雲の国があったということが不都合だから日本書紀に出雲神話がほとんど語られていない。古事記は日本が成立する以前の物語が多い。
- ・ 古事記の物語には滅ぼした出雲への同情や鎮魂が見られる。

日本書紀と古事記の比較

	日本書紀	古事記
発起人	天武天皇	天武天皇
編纂者	舎人親王ほか渡来人も	稗田阿礼が誦習し、太安万侶が記す
成立年	養老4年(720)	和銅5年(712)
巻数	全30巻＋系図1巻	全3巻
文体・文字	漢字・漢文体	漢字・変体漢文(倭文体)
原典資料	『帝記』『旧辞』ほか寺社縁起、中国、朝鮮の史書	『帝記(天皇家の歴史)』『旧辞(豪族の神話や伝承)』
編集方針	海外向け、編年体 後世にも読み継がれる正史 天地開闢から持統天皇(697)	国内向け、物語風、出雲神話、氏族の系譜、天皇中心の歴史書 天地初発から推古天皇(604)

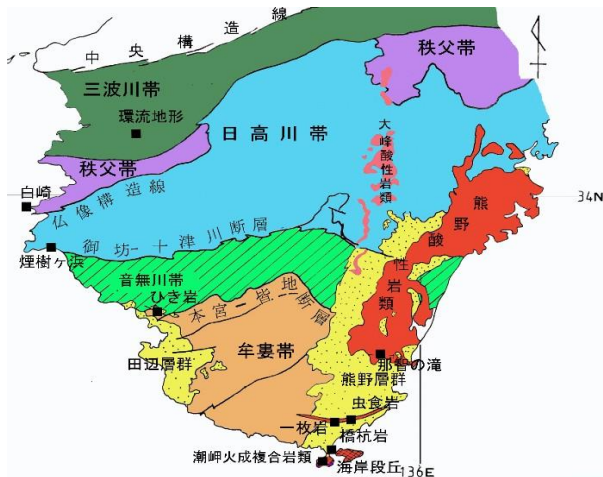
2 紀伊半島と熊野の誕生

- ・1500万年前の熊野カルデラの火山活動。海洋プレートと海底火山の噴火。紀伊半島が絶えず隆起して、多くの峡谷や滝などの景観を造る。
- ・火砕流が噴出してできた花崗班岩の景観。日本の地質百選の「古座川弧状岩脈」「玉置山」などが代表的。信仰や観光の対象となる。南紀熊野ジオパーク。

古座一枚岩、串本橋杭岩、鬼ヶ城、瀨峡、大台ヶ原、古道石畳、楯ヶ崎、大丹倉、

花の窟、那智の滝、神倉ゴトビキ岩、玉置山玉石社、神内神社、古座清書島、新宮御船島など

- ・熊野の産業を支える金銀銅などの鉱物、炭田、勝浦・湯の峰・湯川・龍神などの温泉、紀州御影石、那智黒石、宇津木石などの石材を産みだした
- ・紀伊半島の地質は紀の川北岸沿いに中央構造線が走り、地質的には四万十帯、以北に三波川帯、秩父帯、黒瀬川帯からなる。なお、この地域の地質には火山の要素がほとんどなく、実際に火山は存在しない。他方、歴史の古い温泉がいくつもあり、これは珍しい組み合わせでもある。
- ・吉野・熊野・高野の神仏が座す3つの野がこの地質・地形をベースに誕生。



3 イザナミ葬送地は熊野か出雲・比婆山か？

◎古事記「イザナギは大いに悲しみ、嘆きながら死んだイザナミを出雲の国と伯耆の国との境の比婆山に葬った」

◎日本書紀「イザナミノミコト火の神を産む時に、灼かれて神去りましぬ。かれ、紀伊国熊野の有馬村に葬（はぶ）りまつる。土俗（くにびと）この神の魂を祭るには、花の時には花を以て祭る。又、鼓（つつみ）吹（ふえ）幡旗（はた）を用（も）て、歌い舞ひて祭る。」

- ・イザナミの葬送地は古事記では出雲と伯耆の境にある比婆山。日本書紀では紀伊国熊野有馬村・花の窟とされる。
- ・朝廷は北方系の出雲と南方系の熊野の両方を必要とした
- ・古事記では出雲神話が中心だが、日本書紀では語られない。
- ・比婆山信仰圏は備後、出雲、伯耆にまたがる広域なエリア。
- ・出雲地方と熊野地方の地名の類似性がある
- ・三重県熊野市には花の窟お綱かけ神事と二木島船漕ぎ祭りと日本書紀に因む古代の祭りが二つある。

①熊野のイザナミ信仰

【日本書紀の神生みの舞台・花の窟神社の祭りとお綱かけ神事】

「イザナミノミコト火の神を産むときに、灼かれて神去りましぬ。故、紀伊国の熊野の有馬村に葬りまつる。土人、この魂を祭るには、花の時には亦花を持て祀る。(日本書紀卷第一神代上)」秋には鶏頭、菊など、春にはスイセン、椿など季節の花を供えて神の魂を弔う。

2月と10月の2日、年2回祭礼が執り行われるイザナミの魂を鎮めるための祭りで、180メートルの7本の縄を纏めて1本のお綱として「ダイハナ（大般若）」とよばれる海の中に沈む花の窟に向ってお綱を引く。日本書紀の記述どおりの祭礼が行われる

ただし、お綱かけ神事は日本書紀の記述にないので、農耕が盛んになった頃の豊作の予祝行事（2月）と新嘗祭（10月）の意味があると思われる。

熊野市有馬町日初にはイザナミノミコトを祀った石碑があり、その近くには千引の磐座がある。イザナギと黄泉の国に入ったイザナミは壮絶な戦いを繰り広げるが、イザナミが遣わした鬼をイザナギは桃をぶつけて退散させた。桃で鬼を退ける始まり。有馬では桃の原種といわれる石桃が栽培されていた。纏向遺跡からは2800個の桃の種が出土した。卑弥呼が使ったのか？

【花の窟祭の花の飾られたお綱】【2月と10月のお綱2本が掛けられている。豊作を占う神事】



②出雲のイザナミ信仰

比婆山熊野神社の祭神はイザナミノミコト。本殿は別名・熊野権現と呼ばれた。幣殿にはイザナギノミコト、アマテラスオオミカミ、オオクニノヌシノミコト、スサノオノミコト、ククリヒメを祀っている。和銅6年（713）までは比婆大神社と称したが、熊野修験が入ることにより嘉祥元年（848）に熊野神社に改称され、熊野化された。熊野神社略記には比婆山がイザナミの御陵であることが書かれている。昭和初期までは神札は烏文字の宝印であった。かつては烏を司る烏大夫と呼ばれる神官がいた。

本殿は本宮、二ノ宮は速玉、那智の滝には那智山と熊野三山信仰を表している。境内奥の二ノ宮神社。速玉男神が祀られ熊野信仰や熊野修験との関わりをうかがわせる。三ノ宮は飛瀧権現といわれ、祭神は黄泉津事解男命。少し登ったところには那智の滝があり滝本観音堂の千手観音も祀られていた。

【熊野神社本殿】

【比婆山山頂の御陵石を取り囲むように7本のブナの老木が立つ】



【出雲国一之宮・熊野大社と紀州熊野との関係】

- ・ 出雲国風土記で大社の別格扱いを受けていたのは熊野大社と出雲大社だけ。熊野大社は出雲一之宮、出雲大社は二之宮。日本火之出初之社。
- ・ スサノオを祀る熊野大社ではイザナギの子で食物を司る「櫛御気野命」を祀っていたが、スサノオの別神名とする信仰が生まれ現在に至る。出雲国風土記では「熊野大神の社座す」とある。
- ・ 鑽火祭では出雲大社の千家宮司が神聖な火を授かりに餅を持参する熊野大社に出向く亀太夫神事が行われる
- ・ 意宇川の上流の上社がある熊野山（天狗山）には紀州熊野の神々を祭る。熊野大社は古い時代から紀州熊野の修験者の影響を受けた。比婆山熊野神社も熊野修験の影響を受けた。



4 出雲と熊野の黄泉比良坂

イザナギノミコトはイザミノミコトにもう一度逢いたいと思い、その後を追って**黄泉の国**（地下にあると信じられた死者の世界）に行った。黄泉の国の御殿の戸からイザナミノミコトが出迎えると、イザナギノミコトは、「わが愛しの女神よ。わたしとあなたで作った国は、まだ作り終えてはいない。もう一度戻ってきておくれ。」と言ったが、イザナミノミコトは、「わたしは、とても悔しいのです。あなたは、すぐにわたしを助けに来てくださいませんでしたので、黄泉の国の食べ物（**黄泉戸喫**）を食べてしまい黄泉の国の住人になってしまいました。しかし、愛しいあなたが、せっかくおいでくださったので、わたしも帰りたと思います。これから黄泉の国の神に相談いたしますので、その間は決してわたしの姿を見ないでください。」

と言って御殿の中へ戻って行った。

しかし、女神はなかなか出てこないで、イザナギノミコトはしびれを切らしてしまい、髪に付けていた櫛（くし）の太い歯をひとつ折って、それに火をともして御殿へ入って中をのぞいた。そこには、世にも恐ろしい光景があった。女神のからだから、たくさんの蛆虫（うじむし）が湧き出でいて、ゴロゴロという音がしており、頭からは大きな雷が、胸には火の雷が、腹には黒い雷が、陰部には裂けるような雷が、左手には若い雷が、右手には土の雷が、左足には鳴る雷が、右足にははねる雷の八種類の雷が発生してゴロゴロと鳴りひびいていた。イザナギノミコトは、たいへん驚いて一目散に逃げ出した。イザナミノミコトは、「あなたは、わたしに恥をかかせましたね。」と言って戦いが繰り広げられた。

イザナギの姿を見てしまい、イザナギとイザナミの壮絶なバトルが繰り広げられる。

黄泉の国と葦原の中つ国を結ぶ黄泉比良坂のモデルとなったのが古墳の横穴式石室と言われる。イザナギが鬼の追っ手に対して、蔓草や櫛、桃などの呪術的なものを投げて追い払っている。黄泉比良坂を無事通り抜けたイザナギは入口を大石（千引きの磐座）で塞いだ。

【出雲揖屋の黄泉比良坂の千引きの磐座】

【熊野有馬の千引きの磐座】



5、日の出ずる熊野と日沈みの出雲、建国神話の熊野と国譲りの出雲は陰陽の関係

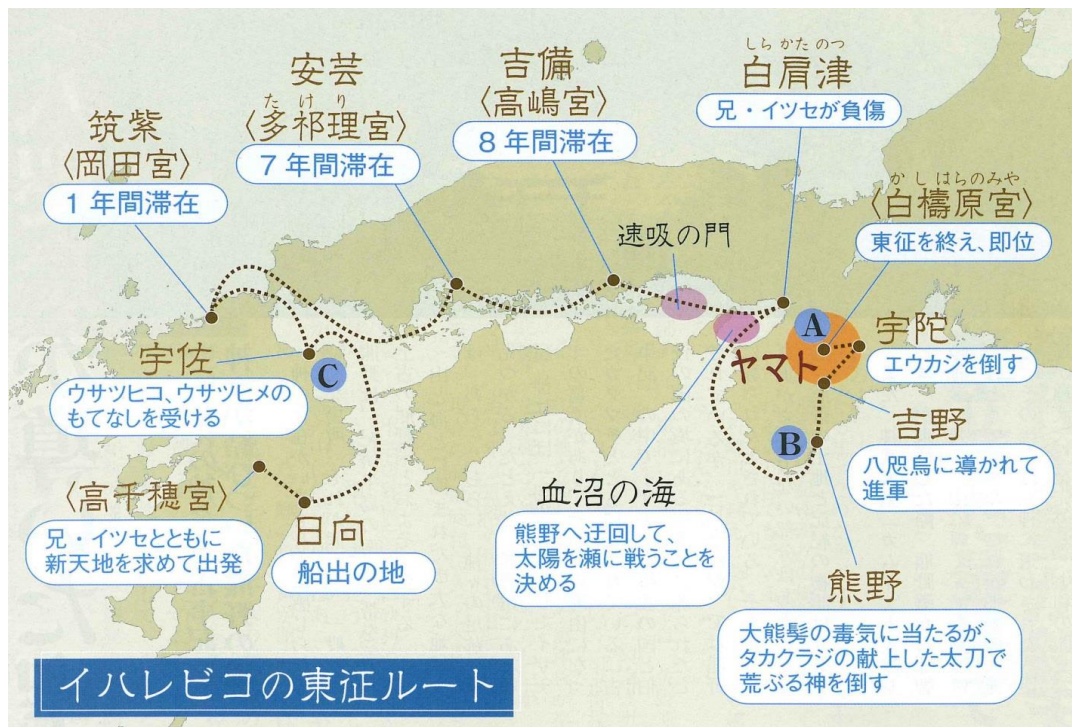
【神武東征神話の舞台は日の出る熊野。国譲り神話の舞台は日の沈む出雲】

- ・ 古事記、日本書紀では陰陽の二つの地域が必要だった。
- ・ 日本書紀では苦難の末に天皇の地位に着いた正当性を、古事記では出雲王国を力の末に国譲りをさせたことが書かれる。
- ・ 一方では、巨大な神殿を建てたことにより、大国主命への哀惜の念も感じられる。

【神武東征神話は日の出ずる東方への国造り】 日出ずる熊野への上陸

東征譚はイワレビコが神武天皇になるまでの通過儀礼的な物語。

- ・ 「東に美き地有り。青山四周（よもにめぐ）れり」塩土（潮つ路）老翁
- ・ 各地の豪族や神々を従わせ稲作を広めるための東征であった。
- ・ 五瀬命「日の神の御子が、日に向かって戦うのは良くなかった。だからナガスネビコごときに痛手を受けた。今から進路を変え、背を日に受けて戦おう」



【タカクラジの新宮神倉神社ゴトビキ岩】

【神武天皇上陸地の楯ヶ崎】



【神武天皇東征伝承と二木島船漕ぎ祭り】

日本書紀・卷三日本磐余彦天皇（神武天皇） 「軍は名草邑に着き、すぐさま名草戸畔を殺した。とうとう狭野を越えて、熊野の神邑に着き、天の磐楯に登った。そこで軍を率い、だんだんに進んだ。海の中でにわかに突風にあい、皇船は漂流した。このとき稲飯命が嘆いて言った。ああ我が祖は天神で、母は海神なのにどうして私を陸で苦しめ、また海で苦しめるのか。といい終わるとすぐ剣を抜き海に入った。…熊野の荒坂の港に到着した。そして丹敷戸畔というものを殺した。」

- ・ 神武天皇東征の際に海に沈んだ稲飯命と三毛入命を助けに行った故事を再現した祭り
- ・ 関船は二人の命の亡骸を乗せた葬送の船



【日沈みの出雲】

古代から出雲は日の沈む聖地とされており、夕陽を神聖視して畏敬の念を抱いた。

「日沈宮」の日御碕神社。「天日隅宮」の出雲大社と呼ばれる。

日御碕神社社伝では「伊勢大神は火の本の昼の守り、出雲の日御碕の清江の浜に日沈宮を建て、日の本の夜を守らん」とある。日が沈む海の彼方に繋がる異界の地。

日が沈む聖地・出雲の象徴が稲佐の浜と「日沈宮」の日御碕神社。古代から夕陽を神聖視して畏敬の念を抱いた。出雲大社は「天日隅宮」と呼ばれる。

【稲佐の浜に日が沈むころ】

【県道より日御碕神社全景を見る】



スサノオと天照大神を祀る日御碕神社。楼門をくぐった正面が天照大神を祀る「日沈み宮」といわれる下の宮。8月7日の夕刻「夕日の祭り」が催行される。

【出雲大社拝殿】【国譲りの際に建てられたと言われる、かつての高層神殿を再現したもの】



【タケミカズチが大国主と国譲りの直談判した屏風岩】【勝負の神タケミカズチを祭る因佐神社】



6 国引き神話に見る出雲の日本海文化交流圏と熊野のイザナミ神話に見る

黒潮太平洋文化圏

- ・ 出雲を仲介して糸魚川のヒスイ（翡翠）や勾玉が中国や朝鮮半島との交易が成されていた。日本海を舞台に大きな交易圏を現すのが「国引き神話」。オオナムチノミコトが越（高志）の国のヌナカハヒメ（翡翠を産する糸魚川の守護神）を妻に娶ろうとしたのは出雲と越の国との関係を示しているものである。出雲大社の真名井遺跡からは勾玉が出土。出雲は北陸や北九州を結び、大陸と交わるための重要な拠点。



- 出雲国風土記にだけ記される、出雲の国の成立を物語る神話が「くにびき神話」。島根半島が日本海に突き出し、宍道湖と中海を取り込む独特な地形に加え、大山と三瓶山が両端に聳える。
- ・ ヤツカミズオミツノミコト（八束水臣津野命）が「出雲の国は細長くてまだこれからの国だ。どこからか国を引いて来て縫い付けなければならない」と考えた
 - ・ 三瓶山（佐比売山）を杭に見立て、萩の長浜を綱に見立てて「国来。国来」と言って新羅の国から土地を切り離し、杵築の岬を縫い付けた。
 - ・ 大山を杭に見立て弓ヶ浜を綱に見立て越の国（北陸）から土地を引き寄せ、三穂の岬（美保関）を縫い付けた。
 - ・ 長浜神社はヤツカミズオミツノミコトを祭神として祀る。

- ・くにびき神話は出雲が大きな交易路だった日本海を通じて外の世界と繋がっていたことを表す物語。日本、中国、朝鮮半島との日本海交易権が出来ていた。
 - ・越の国・糸魚川の翡翠は日本の宝石の原点と言われ、勾玉は三内丸山遺跡など古代縄文時代の遺跡から翡翠を加工した宝石（勾玉など）が見つかっており、大きな流通圏を形成している。また、出雲大社命主社の弥生遺跡からは糸魚川の翡翠を加工した勾玉と銅戈が発掘されている。
 - ・『日本書紀』における八岐大蛇の記述がある一書第四では、「天から追放されたスサノオは、新羅の曽尸茂梨（そしもり）に降り、この地吾居ること欲さず、息子の五十猛神（いそたける）と共に土船で東に渡り出雲国斐伊川上の鳥上の峰へ到った後、八岐大蛇を退治した」とある。
- 【国引きの綱に見立てられる藺の長浜と杭の三瓶山】 【糸魚川の翡翠の勾玉】



◎インドネシア・バリ島ヒンズー教の花祭、ガルンガン祭は花の窟祭りと呼ばれる。

黒潮流れる紀伊半島の祭りや神話は南方のミクロネシア、ポリネシアなどと酷似。

各家庭の玄関先には日本の七夕の竹飾りにも似たペンジョールが立てられる。祖先霊や神々は、このペンジョールを目印に各家庭に降り立つと言われている。ペンジョールは、龍を模した物とも、聖なる山アグン山を模した物とも言われ、ペンジョールが立ち並ぶ姿は、神々のすむ島・バリ島らしい風景とも言える。

【ガルンガン祭の供え花】

【各家庭の玄関先にペンジョールが立ち並ぶ】

